

業務効率化を、必要十分へ。

AIと社内ツールをつなぐ新標準「MCP」とは。 仕組みと活用例をわかりやすく解説

「AIに社内データを参照させたい」「複数のツールをAIで横断したい」——そんな課題に応える仕組みとして、MCP (Model Context Protocol) が急速に普及しています。本資料では、MCPが何を解決するのか、中小企業が最初知っておくべきことを整理します。

MCPとは何か——「AI版の共通規格」という考え方

MCP (Model Context Protocol) は、AIとデータソース・外部ツールをつなぐためのオープンな標準規格です。2024年11月にAnthropicが公開し、2025年12月にはLinux Foundation傘下の「Agentic AI Foundation」へ寄贈されました。現在はAnthropicだけでなく、OpenAI・Microsoft・Google・AWSといった主要プラットフォームが採用しています。

MCPを理解する一番の近道は、USB規格に例えることです。USBという共通規格が普及して、どのデバイスも同じ口で接続できるようになった。MCPはAIに対して同じことをします。

AIから見て、どのツールも「同じ口」でアクセスできる状態をつくる——それがMCPの役割です。

なぜ今、急速に広まっているのか

MCPの採用速度は目を引くものがあります。月間SDKダウンロード数は、2024年11月時点の約200万件から、2026年3月には9,700万件に達し、公開MCPサーバーも1万件を超えました。

- **主要プラットフォームが対応済み**：OpenAI・Google・Microsoft・AWSがサポートし、特定ベンダーへのロックインが起きにくい。
- **オープンな標準規格**：Linux Foundation傘下で管理され、特定企業の思惑に左右されにくい。
- **既存ツールとの接続が容易**：Slack・Notion・Google Workspace・GitHubなど多くのSaaSがMCPサーバーを公開。

MCPで何ができるか——3つの具体例

① 問い合わせ対応の効率化

製品マニュアルや問い合わせ履歴をMCPサーバーで管理すると、AIが参照しながら回答を生成でき、返答の品質が安定します。

② 在庫・受発注の確認を自然言語で

在庫管理システムをMCP経由でAIと接続すると、「商品Aの現在庫は？」といった質問に自然言語で即座に回答を得られます。

③ 定型レポートの自動生成

売上・アクセス解析・顧客管理の情報をMCPでAIに渡し、週次レポートのドラフトを自動生成。担当者は確認・修正するだけになります。

中小企業が取り組む際のポイント

- **まず既存ツールのMCPサーバーを探す**：最初から自社で開発する必要はありません。
- **AI側も選択肢が広い**：Claude・GPT系・Microsoft Copilotなど主要AIがMCPクライアントとして動きます。
- **セキュリティ設計は最初に確認**：AIがアクセスできる権限を適切に絞り、監査ログの設計を確認する。
- **小さく始める**：社内の「よくある質問」に答える構成から試すと、リスクを抑えて効果を確認されます。

ご相談・お見積りは無料です。

株式会社DnDでは、AIと社内システムの連携設計・開発支援を承っています。お問い合わせ：<https://dnd-inc.jp/contact.html>